

## 映画「病院で死ぬということ」 を鑑賞して

自主上映運動の輪を全国に！

曾我 秀秋（センター事業団）

末期ガン患者の終末医療の姿を通して、人間の尊厳ある生と死、人や家族のあり方、人間が人間らしく豊かに生きられる社会とはを問かける、映画「病院で死ぬということ」は、各地で静かな感動を呼び起こし、今後の自主上映運動の成功に確かな予感を与えている。

3月から行なわれている全国有料試写会には、すでに1万5千人をこえる観客がおとずれ、その多くは、自らの人生をこの映画に重ね合わせながら、今生きていることの実感をあらためて感じとっている。

また、映画に対する評価も高く、文部省選定をはじめ、PTA全国協議会、東京都、優秀映画鑑賞会、全国農協婦人協議会などの推薦や、多くの自治体からの後援、協賛も得ている。今後こうした流れは、一層拡がるものと思われる。

映画「病院で死ぬということ」の最大の特徴は、製作から、普及まで、全て働くものの手でつくりあげられている点である。

上映普及に関しては、全国の労働者協同組合が中心となり、多くの市民とともに自主上映方式で展開される。自主上映は秋以降全国で行なわれる予定であり、多くの協同組合や、様々な団体、個人との出会いを基礎にして、「百万人の感動」をつくりあげることを目指している。

労働者協同組合にとって、映画の製作自主上映運動は、主体的力量を高めることとともに、上映運動を通じ、多くの人との出会いをつくりだし、協同のネットワークを作り上げるための重要なとりくみとして位置付けられている。

映画が、多くの人々の協同の力を生み出し「自立と協同と愛」を基礎にした、豊かな社会を実現するために役立つことを願っている。



### 「病院で死ぬということ」を観て

杉本 時哉（労働金庫連合会顧問）

「病院で死ぬということ」という映画を観て、いろいろ考えさせられた。退職してここ1年近く、身体のあちこちらに変調が現れ、あちこちの病院のお世話になった。身近の友人たちの葬式や入院に立ち会う機会も増えた。そういう時期だけに、身につまされて考えさせられたということもある。

映画は、しかし、変に深刻ぶるのではなく、痛に侵された人々の死に直面した苦悩と生き様を、淡々と描いている。また、そうした人々の最後の生き様に立ち会う医師の表白を、これまた淡々と描いている。フォーカスを固定して病室内の患者と見舞いの近親者、医師と看護婦その他の病院関係者、そうした人々の動きと短い会話等が、患者の病院外での生活のリズミカルなテンポのフラッシュを間奏曲にして、淡々と展開され、かえって効果をあげている。

日頃、健康自慢で生きてきた私も、ここ暫く病院の厄介になって、あらためて、通院・入院の患者の多いのに驚いた。入院も高価な精密機器を使つての検査も、患者の都合よりも、病院の事情に大きく左右される。ちょうど、テレビでは、「患



者の権利」の確認・法制化をもとめての厚生大臣への申し入れの場面を撮して、3時間待ち、3分診療の改善を訴える運動があることを、知らせている。

「病院通いは半日仕事」は私自身の最近の体験でもある。しかし、初診の時、医師が病因を突き止めるために、検査機器の順番待ちに苛立ちながら、患者の立場から検査手配に懸命に努力するのを観た。初診では余り待たされなかった。再診からは朝一番の受付に入れても、診察を終え病院をでるのは確実にお昼を過ぎる。「初診や重症の患者さんを優先します」という看護婦さんの説明には、3時間待ち3分間診療の矛盾は感じながらも、初診・重症の患者さんのことを思うと納得した。それでもこちらから聞いたからである。医療関係者と患者とのコミュニケーションが足りないことは否定できない。「癌の告知」は医師・患者双方にとって気の重い現実だろうが、私自身も、現れた病状の原因がわからず、各種検査結果はすべて「白」と告げられて、それはそれなりに安心はしても病状は変わらず積極的な治療方法も示されないで医療不信を感じたものである。今は東洋医療の鍼で快方に向かっている。映画の山崎医師のように、患者と同じ視線で、患者の心に寄り添う、そういうコミュニケーションのある医療、患者と医療関係者のあり方、人と人の信頼と愛情に満ちた関係が望ましい。

かつて一緒に仕事した40歳台の若い仲間が肝臓癌に侵されたことがある。最初の病院では告知がなく、間接的に知った彼は医療不信になった。別の病院に移って最初から病状を逐一教えられ、医師とともに癌と闘った。一時は元気になり職場の仲間とゴルフをするまでになった。しかし、結局、副作用の強い抗癌剤を拒否して、やがて彼は一命を絶った。彼が感謝を口にして最後まで生きたことが、私たちの唯一の救いだった。

この映画に登場する野口さんのように、「死を乗り越えることができるのは勇気でも、あきらめでもない、愛なのだ」素直にこのエンディングの言葉に感動した。



## 死ぬときこそ幸せにいきたい

塩田 長英(明海大学教授)

子や孫に囲まれて幸せな老後を送ろうとしていた川村夫妻、女手ひとつで子育てを終え、これからの人生を楽しもうとしていた池田さん、身寄りもない放浪生活にいた藤井さん、そしてようやく中堅サラリーマンとして仕事と家庭を充実させようとしていた野口さん、これらの人々を襲ったものはガンである。

入院、不安と闘いながら手術、入退院を繰り返すうちに、自らの生命の行きつくところを知る。怒り、恐れ、絶望、諦め、さまざまな感情が本人はもちろん、周辺の人々を苦しめる。医師は、看護婦は、こうした患者とその家族達に目をそらすことはできない。幸せに全うすべき人生にとって病院とは何なのか、病院に何ができるのか、病気と対峙すればするほど医師も、看護婦も悩む。

私の父はもういないが、88歳の母は入院中だ。82歳の妻の母は動けない。人生の終着駅はどこか。当人もそして私も分らないし分りたくない。映画は、その私にこう呼びかける。皆、家に帰りたいのですよ。愛情のある家で死にたいのですよ。私はその声を受けとめることができるのか、私にできるのか。

医師を演じる岸部一徳が素晴らしい。背中や横顔で彼の悩みがひたひたと伝わってくる。カメラも美しいが、音楽が良い。この音楽が重苦しさや哀しみを和らげてくれる。映画は何も解決してくれはしないが、私たちの努力の支えになってくれるように思える。見終わって声もない。うっすらと涙がにじむ。



## 病院での座禅

勝部 欣一（日本生協連参与）

基本的には一つのアングルから、人間の生き様と死に様をじっと見つめるというこの映画の構成自身、あまり経験したことがない。

若い頃静岡の臨濟寺ということで座禅をしたことがあったが、海軍予備学生に出る前だったので、行けば死ぬのかなと死も漠然としていた。

この映画では、病院で座禅を組んでいるようなもので、いやでも死と対面せざるをえない。

自分自身がいまは年のわりに元気だけれど、近く直面せねばならない現実と本人及び近くの人間の心像を直視させてくれる。

幸いに死ぬときそのものは見せないで医師のビヘイビアが印象に残るが、感動はジワッとくる。

生きている社会のながれ、祭ミコシなどが、ゆっくり死に面しているものとの対比を浮かばせ、死もその社会の流れの中にあるんだなあと思う。

しかし若いサラリーマンがガンで死ぬ、その告知はキツイ。予防医学の一段の進展を祈る。

## 「病院で死ぬということ」を観て

前川 禮太郎（㈱日本火災健康福祉サービス）

この映画は特にテーマを絞ってそれを繰り返して強調する手法をとっていない。然し描かれているシーンのすべてが人間の生き様の根源に問いかけるものであり、特に病院に閉じ込められ死と対峙しながら治療を受けている患者を真正面から取り上げるのだから、舞台劇の様な手法で冷静に実態を描き出すことにより観客が各自の問題意識を夫々深めることを意図したように思う。

私も原作を発表当初に読み感銘を受けた者の一人であるが著者は病院が患者の人間としての訴えに余りに無関心であることに悩みながら、新しい医療のあり方として終末医療の重要性を強調していたように覚えている。

映画も当然このテーマを中心に据えている。患

者・家族を含め人間としての生活全体が癌など死と直面する病で入院した際現在の病院がどのように関わるのかいくつかのケースによりその実態を伝えている。その中で告知という問題が大きなポイントになっているが、その是非を云々することが直接問題になるのではなく、それを転機として人間として充実した終末を迎えられた事例を紹介している。これは告知の効果ではなく、患者を支える家族と医師・看護婦・関係者の温かい心情によるものであると思う。

現在変革を求められている所謂医師のパターンリズムの支配は特に病院において一朝一夕では払拭できるものではないが、昨今、インフォームド・コンセプトが強調され患者の権利を保障する法律の制定を求める運動が始まっている事に今後注目していく必要を感じている。

そういう点で映画の中で川村家にかかわる事例で周囲の努力で夫が他の病院の妻に面接出来るシーンがあるが、要請にこたえてそれを可能にした山岡医師の決断は現在の病院の実態からは考えられない大英断であるように思う。死期を間近にして夫婦で語り合うことも容易でないのが現実であるように終末期をほとんどの人が在宅でなく病院で迎えるを得ないわが国の医療・福祉制度に問題は多い。

今後は医療も福祉も人間の尊重を根本において再構築されなくてはならない、その基礎には愛情が必要となる、映画での野口さんは家庭でのそれを確認出来て充実した終末を迎えることが出来た。

その人の死はその人の生き様の結果であると言われる、充実感ある毎日を送るには私にとってはあるべき医療、福祉再構築のためお互いの力を結集して微力を尽くすことが肝要であると考えている。

とにかく、この映画は重たいけど今必要なことを真正面から提起したことになったと思う。